令和元年度 庄原市生活支援体制整備事業実践報告会

開催レポート

令和元年８月 31 日開催
＠口和自治振興センター
　ホール

第２回

ささやかだけど “キラッ”と輝く 地域の取り組み

　生活支援体制整備事業は、介護保険制度に位置づけられた、福祉の地域づくりを進める事業で、庄原市では平成 28 年度から実施しています。
　実践報告会は、この事業について、各地域で取り組まれている活動を紹介し合うことで、それぞれの活動の大切さを再確認し、新たな活動につながる場となることをめざし、昨年度に続いて開催したものです。

プログラム

１３：３０	開会・あいさつ・オリエンテーション
１３：４５	導入　「生活支援体制整備事業について」
１３：５５	事例報告①　新坂自治振興区協議体　「新坂まごころの会」
１４：３０	休憩
１４：４０	事例報告②　高自治振興区協議体「ありがとうの会」
１５：２０	事例報告③　口和自治振興区協議体「ぬくもり会議くちわ」
１５：５５	まとめ
１６：００	閉会

実践報告会のコンセプト

「生活感」「手づくり感」「地元感」

　この３つが、実践報告会のキーワードです。
　これらには、「すごいことでなくて良いから、身近なところでちょっと輝いている取り組みの積み重ねを大事にしよう」「派手じゃないけれど良いものをつくっていこう」という思いがこめられており、昨年度から続くコンセプトになっています。

○庄原市内の事例にこだわり、市内の地域同士がお互いに共感できる会にする。

○先進的で完成された事例ではなく、取り組みの途上でも良いので、“キラッ”と輝くような大切なポイントが見える事例を取り上げる。

○報告を聴いた人たちが、「自分たちにもできる」と前向きな気持ちになれる。

　“普段の暮らしの中で、地域や身近な人のことを想う気持ちが少しずつ形になってきている、そんな取り組みの報告を聴くことで、それぞれの地域の取り組みが、また一歩前進する”、そんな会を目指して開催しました。

実践報告の進行役

１つの発表ごとに、質疑や意見交換を行う時間をたっぷり設けました。昨年度に引き続き、地域福祉に精通したこのお二人に進行をお願いし、各事例を掘り下げ、会場からの発言を受けながら全体で学びを共有したり、お互いにやる気や元気が得られたりするような時間にしていきました。

ファシリテーター
奥田 久美子 さん

庄原市社会福祉協議会
生活支援
コーディネーター
（第２層統括）

メインの進行役です！

サポーター
上田　正之 さん

庄原市高齢者福祉課
生活支援
コーディネーター
（第１層）

経験豊富な知恵袋です！

～ここからは当日話された内容の紹介です～

導入　『この事業の背景、目的について』
説明者　生活支援コーディネーター　上田　正之 さん

説明要旨

全国的に、加速度的な少子高齢・人口減少社会化が進行。
そこからおきる様々な問題への対応が全国的な課題に。
生活上の課題や不安に、どう向き合い、暮らしていくのか。そこで出てきたのが、**その人なりの生活をつくる「地域包括ケア」**。
医療、介護、地域（生活支援・介護予防）が連携し、その人の必要に応じた支援が提供されたり、参加する機会が得られたりすること。

★"地域包括ケア"を表す植木鉢図★

「<地域包括ケア研究会>地域包括ケアシステムと地域マネジメント」掲載図に、庄原市で花とじょうろを加えたもの

生活支援体制整備事業は、主に自助・互助の部分を担う事業です！

★庄原市が目指す地域包括ケア★
- まず本人が、自分の暮らし方を自分で選び、家族と話をする。自分の健康を保つ（自助）。
- 地域の中でお互いに助け合う（互助）。
- その上で、専門職が関わる（共助・公助）。

その人ごとに、自助・互助・共助・公助が上手に噛み合っていくように取り組んでいく。

生活支援体制整備事業とは
住民参画による"**暮らしやすい地域づくり**活動"を進める事業。

この事業で出てくる用語
協議体‥**話し合い・活動の場**。地域課題を話し合い、地域だからできることを形にする。
生活支援コーディネーター‥**つなぎ役**。話し合いの場を作ったり、情報提供したり、地域の資源探しを手伝ったり、ニーズ（困り事）と応援者をつないだりする。

「医療や介護の制度の隙間を埋めるのが自助・互助」という言い方をする人がいるが、それは違う。「**"自助"や"互助"では難しい部分を補完するのが"制度"**」である。
自分が支える地域は、自分を支えてくれる地域でもある。志を持って、「自分たち」の手で取り組まれている**日々の暮らしに根づいた、地道な活動**を共有していきたい。

報告①

新坂自治振興区協議体「新坂まごころの会」
『みんなで思いを１つに　できることから始めよう　笑顔で暮らせる新坂』

新坂自治振興区事務局長　赤木　良光　さん
新坂自治振興区事務局員　宮口　典子　さん
＋　生活支援コーディネーター　半瀬 美恵子 さん

発表要旨

もともとあった地域の困りごと
→ゴミの不法投棄、地域生活バスの廃止、高齢者の増加や外出機会が無い人の存在など。
「役員だけでなく、地域のみんなで話し合うほうが良いのでは？」

平成 29 年１月　まずは会長、副会長、支部（自治会）長、社協、事務局で話し合い
→**幅広く地域の声を取り入れて活動するため**、新たな会の立ち上げを決定。
「真心をもって新坂のことを考えよう」という思いで『新坂まごころの会』と名づけた。

平成 29 年４月　第１回『新坂まごころの会』を開催
「地域の人が何に困っているのか分からない」、「集まりの場があれば、体調の変化に気付いたり困り事を聞くことができたりするのでは」などいろいろな意見。→**できることからやっていこう**。

最初に取り組んだのは「集まりの場作り」（H29.7～）
→小地域サロン活動の説明会を行い、各支部に**サロンを立ち上げ**た。参加者からは「**ここに来れば笑っていられる**」「**次に来る日が待ち遠しい**」という声。
→更に、全域を対象に、講師を招いた研修などを行う「まるごとサロン」や、男性が集まりやすい場として自主的に立ち上がった「野菜づくり教室」などもできた。

次は「見守り合い」
ひとり暮らしの方が自宅で亡くなられていたケースがなどから、地域でどんな見守り合いができているかを確認。→声かけや気にかけ合いが**できていることが分かった**。

その次はどうしよう？　→学習会を行い、活動の原点を確認
H30.7 豪雨災害を受けて「命を守る」ために必要なことを話し合った
→防災チラシの各戸配布、自主防災会の必要性の確認などが進んだ。
→「新坂は小さな地域で、**同じ人が多くの役を担っているから、まごころの会も自主防災会も連携を取り、一体的に進めていこう**」という意見が出た。
会のメンバーが交代してもブレないように、キャッチフレーズを作った。
→**『みんなで思いを１つに　できることから始めよう　笑顔で暮らせる新坂』**

○生活支援コーディネーターから
・人口減少や高齢化で地域に諦め感があったが、「まごころの会」ができたことで、心の根っこにあった「どうにかしなければ」という思いが表に出るきっかけになったように感じる。
・「まごころの会」で話されたこと、決まったこと、これから取り組むことを広報で地域の人にきちんと伝えている。ささやかだけど“キラッ“と輝く地道な取り組みだと思っている。

会場との意見交換

○感想・応援コメント
・集まりの場づくりから見守り、災害対策へとつながる地道な取り組みは、この事業の「王道」、ど真ん中の取り組みだと感じた。私たちが目指すのはここだと思った。
・住民に目配りが出来ている素晴らしい取り組みだと思った。参考になった。

○質疑
Ｑ：リーダーの役割は誰がどのように担って進められたのか？
Ａ：誰かが引っ張るというより、役員を中心に皆でしっかり話し合う中で進めている。
Ｑ：まごころの会を通した取り組みを進める上で工夫したことは？
Ａ：行政区（班）長まで構成メンバーに入っていることや、広報で動きを伝えていることで、まごころの会の活動について、住民への浸透を図っている。

報告②

高自治振興区協議体「ありがとうの会」『２年間の取り組みをとおして』

高自治振興区地域マネージャー　米谷　惠子　さん
＋　生活支援コーディネーター　稲里　美鈴　さん

発表要旨

平成 26 年 11 月　高地区支え合い見守りネットワーク事業を開始
→救急医療情報等の各戸配布や**生活の困りごと等の聴き取り**を実施。
聴き取りから、地域課題が見えてきたが・・・
地域マネージャー１人で実働しており、「**解決に向け新規事業になれば皆の負担が増える？**」「**個人情報の扱いをどうしよう？**」など悩み。

平成 28 年度になり、市社協から「協議体」について説明を受ける。
「**困り事を解決していくためには、色んな人の協力を得ないといいことにならない**」と思い、協議体の立ち上げに向けて動き始め、自治振興区の中で協議を重ねた。

平成 29 年６月「ありがとうの会」正式発足
→構成員は自治会長、班長、民生委員、ひとり暮らし高齢者等巡回相談員、自治振興区事務局等。**回によって構成員の組み合わせを変えて情報収集や啓発を進めやすくする工夫**もした。
→最初の議題は、「支え合い見守り合いネットワーク事業」の見直し。議論の中で**自分ごととしてとらえた発言**が出てきた‥「まずは寄る習慣づくりから始めようや」「つながりづくりを考えよう」「ありがとうの会をどう地域に根付かせていくかが大事だ」

ネットワーク事業の中に位置づけている「自治会ごとの情報共有会議」を実施
→ありがとうの会の中で試行。自治会ごとに分かれて気になる世帯の状況を話し合った。
→**実際に情報共有をしてみたことで、「こういう場が必要だ」という感想**が多く上がった。

ありがとうの会を通して進んだこと
・住民告知端末設置状況調査、緊急連絡先の確認、見守りネットワーク未加入世帯の加入、見守り対象者の毎年の確認、小地域サロンの立ち上げなど
・**様々なことを皆で一緒に進めていく流れができた**。

これからも〝おたがいさまのありがとう〟がつながる地域づくりを進める。

〇生活支援コーディネーターから
・最初に協議体の説明に伺った際は、「守秘義務・個人情報保護のため、地域内の福祉の連携が難しい」「これ以上区民に負担をかけられない」と言われ、返す言葉や方法が思いつかなかった。
・その後、米谷さんから「世帯訪問で伺った困り事を１つでも解決したい」という思いを聴き、いろんな人と話をしながら一つ一つ取り組んでいけば先が見えるのではと思えた。
・ありがとうの会で最初にネットワーク事業の話をしたとき、「事務局が進めるもの」と感じている人が多いと気付いた。２回目からは、まずは地域の様子や自分の思いなどを一人ひとりから話してもらうことで、「自分ごと」として話が進みだした。お互いの理解も進んだ。

会場との意見交換

〇感想・応援コメント
・米谷さんが情熱の火種を持ち続けて、それが周りの人に少しずつ広がることで、大きな火になったのだと思う。素晴らしい取組をされており、感激した。

〇質疑
Ｑ：自分の自治振興区では、自主防災組織を自治会単位で立ち上げた。自治振興区全域で１つだと細やかな対応が難しいようにも思えるが、実情はどうか？
Ａ：ネットワーク事業で自治会長、班長とつながりができているので、対応できている。
Ｑ：米谷さんが「自分が頑張らなければ」から「色んな人の力を借りてやればいい」という思いになったときに、何かこれというきっかけがあったのか？
Ａ：「一人でがんばるなや」「みんなが協力するよ」と区長さんと民生委員の代表さんが言ってくれたこと。自分では悩みを見せていないつもりだったが、見てくれていたんだと思った。

報告③ 口和自治振興区協議体「ぬくもり会議くちわ」『ここ(くちわ)で暮らして良かったの実現に向けて』

口和自治振興区事務局長　山田 耕司 さん
＋　生活支援コーディネーター　須安 登茂美 さん

発表要旨

口和地域では、市役所口和支所、社協口和地域センター、口和自治振興区が福祉施策について話し合う「三者連絡会議」が毎月開催されている。その会議から、協議体設置に向けた話し合いが始まった。

三者連絡会議のメンバーに、民生委員代表、警察（駐在）、消防団を加えて協議体がスタート。会の名前は皆で案を出して投票で決めた。
→まずは地域の困り事を出し合い、**「地域や自分たちにできそうなこと」と「できないこと」に分類**。**できそうなことの中身を細かく確認**していった。
→高齢者の声を直接聴こうということで、アンケートを取る事になった。

アンケートの取り方を検討する中で、直接聴いて歩ければ良いという話になり、**ひとり暮らし高齢者等巡回相談員にお願いして、聴き取り**でアンケートをしてもらった。
→巡回相談員からも、「伺った相手との距離が近くなった」、「やって良かった」という声があり、**これをきっかけに、巡回相談員代表も協議体のメンバーに加わった**。

アンケート結果から、「**お店に行けない**」「**重いものを運べない**」という声
→食材・日用品の配達や出張美容等のサービスを調べて**「くちわ〝ちょこっと〟便利帳」を作成**。
→**便利帳印刷の財源には「ふるさと応援会※」を活用**。
→お店の方の意識も、困り事解決に向けて変わってきた。

※口和自治振興区、社協の共同事業で、町外で暮らす口和出身者に協力会費を募り、高齢者世帯の見守りなどの活動に活用するもの。同窓会等で協力を呼びかけている。

ぬくもり会議で工夫していること
- **会の目的を文章にして、毎回最初に唱和**している。
- **お菓子と飲み物を囲んで、和気藹々（わきあいあい）**の雰囲気づくり。

「会議の目的」‥「ここ（くちわ）で暮らして良かった」の実現に向けて
たとえ自分だけではできないことが増えてきたり、介護が必要になったとしても、住み慣れたわが家でできるだけ最後まで暮らし続けることができる。そんな暮らしやすい地域づくりにむけて、生活上の困りごとを自分ごと、お互いごととして考え、できることを一つずつ取り組んでいくこと

今年は消費者トラブルの対策を協議中。**皆が自分ごととして一つ一つ取り組めるよう**協議している。

〇生活支援コーディネーターより

前事務局長（現区長）の清水さんも応援に駆けつけました！

- 話し合いを重ねるごとに、みんなが「自分ごと」になっていったと感じている。みんなが声を出せば、地域の中の色んな困り事が見えてくることを実感。
- 顔馴染みのメンバーが多いから「わいわい」と話が進む。自分たちの地域だからこそ、自分たちのできることをやっていこうという意識がある。
- 「ちょこっと」の達成感の積み重ねが大事。これからは、ぬくもり会議で話し合ったことを地域の皆さんに伝え、一緒に活動できるよう広げていくのが課題。

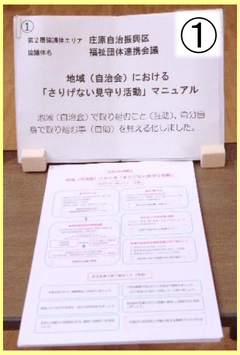
会場との意見交換

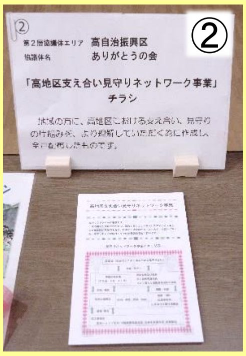
〇感想・応援コメント
- 無理の無い範囲で、頭を捻って、少しの工夫をすることが、長く住み慣れた地域で暮らせることにつながっていると感じた。具体的で参考になる。

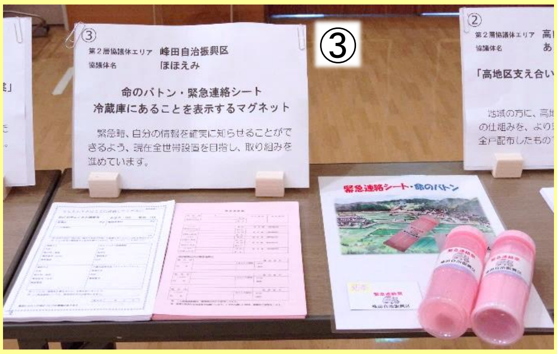
〇質疑
Q：ふるさと応援会の実績について教えてもらいたい。
A：１口 5,000 円で協力会費を募っており、１～２口の協力が多い。件数は年度によるが、概ね 10～15 件程度。返礼品として地元産品、自治振興区広報誌と社協だよりを送っている。
Q：自分ごととして取り組めた要因にはどんなものがあったか？
A：会を進める中でリーダーと副リーダーを決めた。立ち上げメンバーに行政が入っていた中で、行政ではない人がリーダーに就いたのは１つのポイントになった。

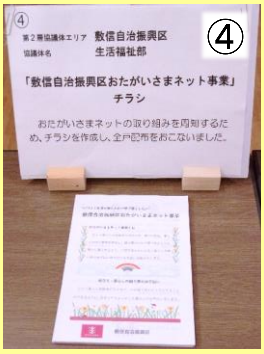
活動成果物の展示コーナー

　各地域の活動の中で出来た成果物を集めて、会場内で展示しました。10 地域の出展があり、住民への周知に使ったチラシや冊子、活動紹介ポスターなど様々な成果物が集まりました！







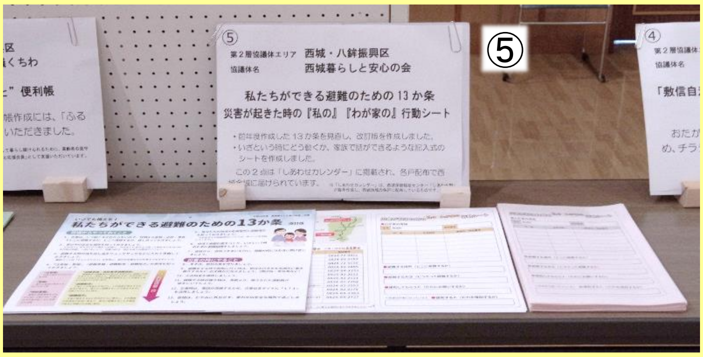


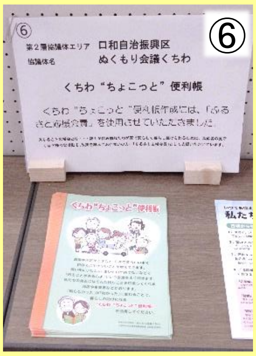
①庄原自治振興区協議体「福祉団体連携会議」
　『地域（自治会）における「さりげない見守り活動」マニュアル』
　地域(自治会)で取り組むこと(互助)、自分自身で取り組むこと(自助)を見える化しました。

②高自治振興区協議体「ありがとうの会」
　『「高地区支え合い見守りネットワーク事業」チラシ』
　地域の方に、高地区における支え合い、見守りの仕組みを、より理解していただく為に作成し、全戸配布したものです。

③峰田自治振興区協議体「ほほえみ」
　『命のバトン・緊急連絡シート・冷蔵庫にあることを表示するマグネット』
　緊急時、自分の情報を確実に知らせられるよう、全世帯設置を目指し、取り組みを進めています。

④敷信自治振興区協議体「生活福祉部」
　『「敷信自治振興区おたがいさまネット事業」チラシ』
　おたがいさまネットの取り組みを周知するため、全戸配布したものです。





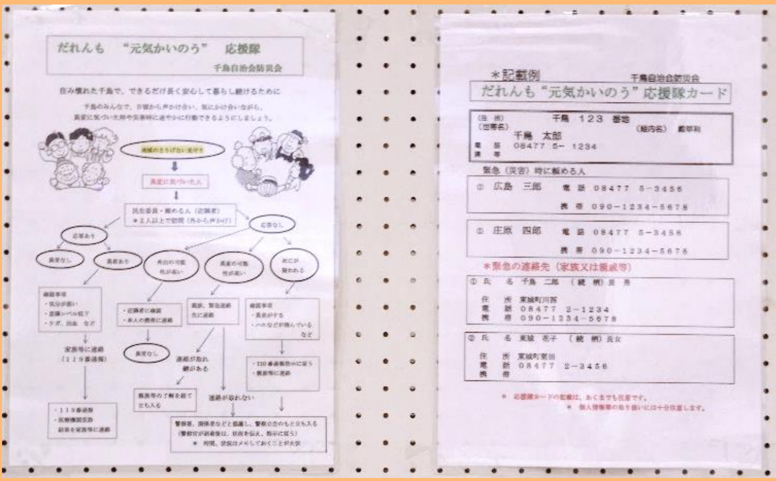
⑤西城自治振興区・八鉾自治振興区協議体「西城暮らしと安心の会」
　『私たちができる避難のための 13 か条（改訂版）＆災害が起きた時の「私の」「わが家の」行動シート 』
　前年度作成した「13 か条」を見直し、改訂しました。また、いざという時にどう動くか、家族で話ができるような記入式のシートを作成しました。この２点は各戸配布で西城全域に届けました。

⑥口和自治振興区協議体「ぬくもり会議くちわ」
　『くちわ“ちょこっと”便利帳』
　くちわ“ちょこっと”便利帳作成には、「ふるさと応援会費」を使用させていただきました。

⑦上高自治振興区・下高自治振興区協議体「なんずかんずつながる会」
　『たかのなんずかんず便利帳（第２版）』
　高野には、暮らしの中に役立てられる資源って、何があるの？‥便利帳第２版！更にグレードアップして配布することができました。みんなの“安心”に役立っています。

パネル展示したもの
（ポスターなど）

⑧



⑧小奴可の里自治振興区協議体「小奴可の里の福祉を考える会」
　『千鳥自治会　だれんも“元気かいのう”応援隊』
　「防災と見守りコラボマップ（※昨年度報告・展示）」のステップアップとして、応援隊活動マニュアルと応援隊カードができました。

⑩

⑨新坂自治振興区協議体「新坂まごころの会」
　『防災チラシ「備えあれば患いなし」』
　豪雨災害などへ備えての「５つの行動目標」や避難に関する用語・非常持ち出し品などについてまとめた「防災チラシ」です。

⑩総領自治振興区協議体「総領さいたらの会」
　『さいたらの会の取り組みについて』
　地域で困っている人をなんとかしたい！という熱い思いを持った人たちが集まり、発足した“総領さいたらの会”。現在までの取り組みを紹介しています。

庄原市からも、「平成 30 年度実践報告会紹介ポスター・開催レポート」「第９期シルバーリハビリ体操指導士養成講座受講者募集」を出展しました。

まとめ

生活支援コーディネーター　上田　正之 さん

これからの時代、地域福祉においては市町村格差が出てくる。もっと言えば、市町村の中でも、地域間格差が出てくる。すぐ目にはみえなくても、５年 10 年で確実に出てくる。何の差かというと、自助意識、互助意識、そこからくる一人ひとりや地域の行動の差。制度の場合は、お金があるほど進むということがあるが、生活支援や介護予防の活動に、お金のある無しは関係ない。やる気や工夫によって格差が出る。

住み慣れた地域で暮らし続けたいという人が多いが、その思いを叶えるためには、必要なことがある。

自らが心を開くこと　周りに感謝すること　地域ができる範囲で支え合うこと

中には病気、介護状態、家族環境などで、在宅生活が難しい人もいる。しかし、「ここで暮らす」ということは、自分の、お互いの、より望ましい取り組みがあることで、より実現できるものだと思っている。今日の報告会で学び合われたような、ささやかな取り組みが続いていくことがとても大切。

こういう会をまた続けていくことで、お互いに学び合えたり刺激しあえたりしたら良い。これから自分の地域に帰って、大変なことがあっても、諦めずに、無理をせずに、一緒に頑張って進んでいこう！

～参加者アンケートから～

地元の有志の方が記録映像の撮影をしてくださいました！こんなところにも地域の力が見えました。

○実践報告を聴いて

- 人つながり、自助・互助…大切ですね。３地域の発表お見事でした!!
- 住民の方が主体的に取り組まれている様子をお聞きできて良かったです。
- 地に足の着いた、地域の課題に対して地道に取組んでおられる姿は、「私たちにも出来るかも‥‥」を広めるいい結果になったと思う。
- 今の活動までの流れ(立ち上げの時の苦労や、達成感など)をお聴きし、小さな活動を少しずつ積み重ねていく大切さに気づくことができました。

○展示コーナーを見て

- 資料の持ち帰りが大変ありがたいです。とても参考になります!!
- 実物があって参考になりました。今日報告されたものだけでないので良かった。

○この研修会、生活支援体制整備事業についてのご意見ご要望

- 日常生活にすごく密着した研修会なので毎年参加させていただいています。末永く続けていただきたいものです。
- 取組が参考になることももちろんですが、発表される方が、生き生きとされていることが印象的でした。
- 各地域の実情に応じた取組がされている。同じようにとはいかなくても自分ごととして一歩ずつ前に進むと良いと思う。

この報告会は、今後も継続した開催を目指しています。

新たな“キラッ”と光る取り組みの報告と、多くの皆様のご参加をお待ちしています！

庄原市 生活福祉部 高齢者福祉課　　〒727-8501 庄原市中本町一丁目 10 番１号

TEL：0824-73-1165　　FAX：0824-75-0245　　E-mail chiikihoukatu@city.shobara.lg.jp